

去る七月末頃、マローヤの山と湖を写した綺麗な絵葉書が舞いこんだ。差出人を見ると井手貴夫さん、マールバッハでの読書三昧の生活からぬけ出し、ボーデンゼーで休養の後、ヘッセの家を訪ね、それからイタリヤ領へはいつてコモ湖畔に遊び、ふたたびスイス領のシルス・マリアへきて、近々氷河のあるところまで出かけてみるという、大変羨ましい便りであった。

マローヤはセガンティーニの故地でもあるから、さだめし風光は明媚であらうし、アルプスでも指折りのガイド、クリスチャン・クルツカーは、たしかマローヤに近いフェックス・タールの生まれだったから、井手さんは大変ご満足のはずだと、羨ましいとともに、友の幸福をひとり喜んだのだが、井手さんも北海道自然保護のためにここ二、三年誰よりもよく奮闘されたのだから、このぐらいの幸せにめぐり会えるのも当然かも知れない。

この便りと前後して、伊藤秀五郎さんから久々にお手紙をいただいた。北海道自然保護協会の会誌に、何か書いてほしいというところである。実は昨夏以来、私はきわめて忙しく、かつむつかしい仕事を与えられようしたことでもできる限りお断わりしているこの頃であるが、伊藤さんには前々から私が編集をやっていた山岳会の会誌に、ず

いぶんご無理をねがって、執筆していたいた問柄でもあって、にわかには断わりにく。そうこうしている間に締切が数日に迫ってしまった。

x

数年前、まる三年間札幌に仕事の関係で滞在していた間は、伊藤さんや井手さんにはしばしばお会いしたし、特に井手さんとは札幌周辺の山々へよくスキーで出かけたものだ。そして、その中には余市岳とか迷沢山などの、あまり人の行かない山もふくまれていた。実は、その三年間に私が北海道の山へ登った数は、かなり多いと思うしまた旅行もずいぶんやった。そこで接した自然の姿は、一口に言って、いまの日本のなかでは、決して他の土地では求めようとしても求められないものが多いのを身にしみて感じたのだ。

土地が狭く、人口が多く、したがって人の手でよごされぬ自然があまりにも少ない日本のなかで、北海道だけは、いまでももつとも自然が自然のままの姿で残されている。しかし残念ながら、それすらも年一年と放置しておけない現状にあるところからこの協会などが、声を大にして運動を展開しなければならなくなったのだと思う。

私は現在、北海道の自然保護に何かお役

にたつような、意見らしいものを言える余裕もないし、勉強の余暇もじゅうぶんない。ただ、北海道の自然はおしなべて、いまの日本にとってきわめて大切な自然であり、原始のまま残さねばならないところはたとえば知床のように各地に数多くあること、たとえ国立公園として指定されていなくても、私がかつて登った道南の狩場山周辺のように、また礼文島のスコトン岬附近のように、人煙を絶した、すぐれた景観が少くない。こういうところもぜひとも、よく保存しなければならぬ、こんなことを申しあげるくらいしか書けない状態である。

また本号は湖沼、湿原の特輯とうかがったが、湿原といえば大雪山愛山溪に近い沼の平と、同じ大雪の五色ヶ原、沼の原が頭に浮かぶ。沼の平を訪れたのは、勇駒別から旭岳、北鎮岳、永山岳と歩いて愛山溪へ下る途次、寄り道をして半月湖まで足を延ばしたときだが、折りからエゾキスゲの花が無数に咲き乱れ、エゾゴザクラも満開の七月の半ばであった。

愛山溪まで車もはいるようになった今日簡単に観光客が足入れられる沼の平は、油断していると、ひどいことにならぬとも限らない。五色ヶ原と沼の原は、北大の橋本誠二さんに案内されて、クワウンナイを

山 北 の 回 想

夫 達 月 望

湖り、トムラウシへ登った帰路、忠別の小舎から辿って行ったところだが、まさに自然の庭園のような五色ヶ原に何度私たちは嘆息をはなったことだろう。そして沼の原の大小数々の池塘に、驚きの目を見張ったことだろう。

私のアルバムを開くと、ミツガシラが美しい模様をえがいている大池の彼方に、石狩、音更の山塊が静もりかえっている一枚が、そのときの山旅をいまでも思い出させてくれる。

沼や池では、黄昏せまるヒサゴ沼（トムラウシの北）や礼文島の久種湖が印象に深い。とくにある晩夏、礼文岳の頂から、カニのハサミのようにつき出た、この島の北端をながめ、久種湖の白く光る湖面を見おろした景は、夕闇迫るオションナイからスコトン岬や海馬島を眺めた景とともに、いまに忘れられない。

海岸に近い湖で思い出すのはサロママ湖である。あの人気のない湖畔には原生花園が幾つもあるし、静かに湖を眺めてぼんやり過ごしていると、忙しく騒々しい浮世から本当に隔絶される思いを抱くだろう。観光客の簡単に行ける湖のなかでは、私は然別湖がいちばん好きである。あんなに清浄な感じのする観光地も、北海道のなかですら数少ない。しかし、糠平湖との間に車道が

完成されれば、それだけ観光客もふえようから、それだけよごされる危険も大きい。

日高の山は幌尻岳しか知らないが、七ツ沼のカールと言われる幌尻の頂上直下のカールには、幾つかの沼がルリ色の水面に山と雲をうつしている。こういう沼のほとりに結んだ天幕の夜のこと、北海道の山を回想するたびに私の脳裏にときどき蘇ってくる。

私は過去四十年にわたって、北海道の山ばかりでなく、日本の山々から、きわめて多くのものを与えられてきた者である。不幸にして外国の自然は、戦争でアリューシヤンのキスカ島にいた以外まったく知らぬが、日本の山々はかなり知っているほうだと思ふ。そしていまでは、それなくしては生きられぬし、それから得たものあまりに大きいことにも驚いている者である。それゆえにこそ、北海道をふくめての日本の自然景観をできるだけ、そこなうことがないう祈らずにはいられない。ひとたび失われた自然は、ふたたび元に戻すことは、ほとんど不可能だからである。

原稿の催促状をいただいた翌日、偶然にもスイスのグリンデルヴァルトでしられた井手さんの第二信がとどいた。それ

によると、かつて植さんを案内したガイド（当時の）の息子で、名前も同じのサムエル・ブラヴァンド君に案内してもらい、メンヒ、ユングフラウ、ヴェッターホルンなどの名山へ登ったという、羨ましいことが縷々書かれていた。

この親父さんのほうは、伊藤さんもグリンデルヴァルトで、その昔親しく会われたはずだから、この便りは伊藤さんにとっても、まことに愉しい知らせであろう。そして自然保護に尽力した井手さんへ、神がもたらした大きな恵みとしみじみ思いつつたない一文の締めくくりとしたい。

一九六七・九月

（日本山岳会々員）

